

幣舞橋の公園脇に白のレンタカーは止まっていた。女はおはようございましてと言ひ助手席に乗り込んだ、運転席の三十半ばと思しき女性がおはようと返す。

「時間通りじゃん、それにその出立、いつものスーツスタイルとは大違い、今日はどうしたの」

「麻衣だってカジュアルと言うか、そのラフスタイルは」

「動き回るのにはこれが一番、出かける時はいつもこうなの」

二人はそんな朝の挨拶を交わした。その女性は東京は小金井市に住む主婦大里麻衣三六歳。普段は電話仲間と言うか良く電話をかけあっている。今日は偶には二人でドライブしようよと女、村井瑠璃子が誘った、其々仕事がある故現地集合となった。

「摩周湖、屈斜路羅湖、阿寒湖三湖巡りだ。その前に釧路湾を眺めてみたい、そこの先を左に曲がって麻衣」

はいと麻衣は返事し、ハンドルを左に切った。

「わー凄い、これが夕陽で有名な釧路湾だー」

瑠璃子が叫んだ。

麻衣も隣で思いっきり背伸びをする、瑠璃子が遠くの一点を見つめている。あいつ言っというたのにもう飲みやがったと、腹の中で呟いた。右に左に激しい方向転換おまけにスピードも上がった。

麻衣が言った。

「あの船おかしいよ」と、

小型漁船の操縦室では

「瑠璃子の奴やりやがったな」

喉をかきむしり操舵輪にしがみ付きながら、一命を落とした。操縦不能になった小型漁船 はそのまま岸壁に激突した。

「よしこれで良し」

と微かな声で独り言、

「今何か言った」

と、麻衣が言う、瑠璃子は別に・・・と、誰が通報したかここかしこでサ
イレンが、

「遠くの船での火災、対岸の火事とでも言うか私達には関係ない、さー麻衣、
三湖巡りに行こう」と

瑠璃子は促した。街中で、

「ごみ収集車を見つけ、あの車の後ろで止めて」

と瑠璃子は言った。瑠璃子はゴミ袋を持って降り、係員に言う。

「朝出し損ないました、これお願い」

と言った。

「お姉ちゃんこっちに持っておいで」

と係員は言い受け取ると、パッカー車に放り込んだ。

摩周湖から、屈斜路羅湖を回って阿寒湖に着いた時は、昼を大分回って
いた。

「遅い昼だが何処かで摂ろうよ」

と麻衣が。食事処を探しながら土産物店をウロウロ、瑠璃子でもなく麻衣でもなく店に入った。木彫りが多い20cm大のフクロウを麻衣が購入、瑠璃子は名付きのストラップを探していた、あつたと言い購入、麻衣がその名の人誰と、聞きよるも内緒と言った。店を出てブラブラしていると食事処奈辺久のぼりが、目に入った。

店に入ると、時間がづれているからか空いている。声もなくお茶が出た。品書きに目を通しす、ワカサギの天ぷらそばを仲居さんに告げた。待つ事十分お待ちどう様の声、来て見てびっくり、ワカサギのてんぷらの量の多さ、優に東京の3倍はある。二人は多くも味あうが如く一匹づつ食した。

「瑠璃子飛行機の時間がある、帰宅時間に掛かると混雑も予想される、早いかも知れんが、釧路空港に向かいましょう」

そうしようと瑠璃子も頷いた。

フライト二時間前に着いた。

「あつ麻衣、駐車場内を私の言うとおりに走らせて」

麻衣は、あれつと想いながらも右に左に、瑠璃子が言うがまま走らせ止まった。

「私はこれから車を返して釧路泊、釧路は想った通りに寒いからレストランでバイキング、明日はゆっくり出て列車を乗り継いで函館、名物のヤリイカを食べ泊まり、翌日、新幹線で東京へ帰る予定です」

「ヤリイカは市場でも、釣って食べられると聞いていますが、忙しないと聞きます、食べるなら市場を出た所に、食事処が数件あります、割高かも知れ

ませんが、落ち着いて活き作りが食べられと聞きます。私はそちらをお勧めします」と瑠璃子が言う。

「市場内をブラブラして他も見ながら考えるは、今日はありがとうございます。ただ、瑠璃子、その薄いグリーンの手袋衣服とマッチするね、お気に入りなんですよ、ワカサギそば食べり以外はズーっと嵌めていたね」「そんなお気に入りなの、まだ運転するからお酒はダメ、コーヒー買ってくるね」

と言って瑠璃子は建物の中へ。

二つのコーヒー缶の一つにバックから小瓶を取り出し缶に液体を注ぎ込んだ。
だ。

「麻衣、歩きながら今日を振り返っていたら、二つとも開けてしまった、御免ね」

と言って小瓶から液体を注ぎ込んだ方を麻衣に渡した。

「ジャー今日にカンパイしよう」と麻衣が。

コーヒー缶を、カチンさせ麻衣が今日にカンパイそして一口、途端に喉をかきむしり缶を落とした。

「瑠璃子、これはいったい何の為」

声を絞り出し、麻衣はシートに凭れた。瑠璃子は車から降り運転席側のドアを開けた、麻衣のバックを開きスマホを取り出し、自分のバックに仕舞い込んだ、更に小さな白い紙袋の入ったレジ袋も、自分のバックに仕舞い、シートを倒し麻衣のコートを額が見える程度にして被せた。

「麻衣、今までありがとう、だけど麻薬取締官から足がつきそうなの」

瑠璃子は車に一礼し、空港内へ防犯カメラを気にしつつ歩いた。空港内も

防犯カメラを避けてトイレへ、小瓶の液体を流し空き瓶は空き瓶空き缶容器へ、幾つもの白く小さな紙袋を開きパラパラと便器に捨てる、白紙は複数個所に分け捨てる。スマホはこれと言って破棄する場所が見当たらない、早めに東京で処分すれば良い、二台持っても今では怪しまれる事はない。

保安所を抜けラウンジへ進む、夕食を摂りながらスマホ出し、電話番号をプッシュ、繋がった。

「完了しました」と、

「ご苦労だったと相手は労った、何か気にかか事はないかね」

「私は、はやてのルリです。誰が企てたと想ってんの、何もありません」

「おつごめんそうだったね、ではゆっくり食事をし、快適なナイトフライトをお楽しみ下さい」

「了解」

と言い瑠璃子はスマホを切った。

八時と次郎にしては遅い目覚めだ。バックから古びてはいるが、洗濯したての袴を取り出し身に着ける、袴を含め使用済みの品々を段ボールに詰め込み、フロントのお嬢さんに宅配便をお願いする。食堂に行った、バイキング形式た、ご飯に味噌汁、タマゴに焼きのりにお新香等々、和食の原点とも言える朝食だ。小生と同年配であろうか、ご夫妻が言った。

「一緒に写真に収まって下さい」と言う、快く頷いた。

「今日は大沼公園へ行くと聞いていた」

「小生は、お昼過ぎの新幹線で東京に帰る予定です」

と言葉を返した。食後、チーフに弁当をお願いする。

「本来、ここではお作りしません」

と言うが、なまもの以外なら用意します」と答えてくれた。

「すかさずお願いします」

「チェックアウト時に申して下さい、フロントへ届けしておきます」

とチーフは言う。

「ありがとうございます」と礼を言いつた。

食後、ロビーで新聞を開いた、次郎の目が大きくなった、釧路で小型漁船が岸壁に激突し炎上、空港では駐車場で女性が青酸カリにより死亡、警察は、どちらも事故自殺或いは他殺で捜査を開始と記されていた。

フロントで宿泊費を払い弁当を受け取った。

「お世話になった、ごめん」と言う。

それが受けたか年齢不明なお嬢さんはクスツとした。

函館駅に隣接する土産売り場で、まりとお揃いの手帖購入、それとストラップを適量、白い恋人を3ケース、小生用に花柄の付箋を。予定しておった函館ライナーに乗り込む、30分で新函館北斗駅に着いた。2階の待合室へ、11番線と12番線を見下ろす事が出来る、何時発か白に緑に赤い帯の入った車両が、11番線ホームに入っている、徐にコンデジを取り出し数枚撮り込んだ。出発迄にはまだ間がある売店を覗いた、車両のミニチュアを数台購入、この中の1つは自分用だとか言いながらレジで払う、そんな事を言いながらの袴姿、異様な風体な小生をじろつと見ながら、年齢不明なお嬢さんは、ありがとうございますと言った。

時間だ、11番ホームに降りる。車体に手を触ったり物珍しく見ていたら

駅員さんが、

「お撮りしましょう」と声を掛けてくれた。

「お願いします」と数カット撮って頂く。

12時48分、新函館北斗駅を、はやぶさ28は音もなく揺れもせず走り出した。

北海道新幹線は初乗りだ、子供心に天井を見たり、体を傾け通路を眺め、流れゆく車窓をキョロつき始める。一駅通過して青函トンネルだ160kmで進行している。只今、最深部の240㍓を通過中と車内アナウンスがあつた。アナウンスを聞き終えた所で、

「遅い昼とすつか」ホテル弁を広げる。

特性のサンドイッチか、食パンの間に野菜や魚の煮物が、これでもかとおかりに詰まっている。食べ難いはしたが辛うじて二つのサンドイッチを平らげ、伊右衛門特茶で一息。スマホのスイッチを入れる、片岡警部補や理紗から捜査状況、相談事もあるうか、次郎はスイッチをオンにした。バックから、警視庁捜査一課警部、十津川省三が活躍する文庫本を取り出し開いた、がいっつしか眠りにつく。

懷でルパンが騒ぎよった、深大寺のまりからかと想う。突如帰ってビックリさせるつもりでいた、もうそれは出来ないそんな想いでディスプレイを見た、まりではない片岡警部補からだった。

「お休みだったかな、それとも十津川警部を読んどったかな」

「十津川警部の方だよ、間もなく盛岡だって、そっから320キロキロだつてよ」

「おう、もうそんな所へ行っているのか、新幹線は早い」

「所で警部補、何か用事でも」

「それがなー、デカ長あいや次郎さん、使われた拳銃が分かったんだ、ドイツ製のワルサーP P kだ。アメリカ経由で相当数が国内に入っていると想われる、先ずは函館の反社会勢力を当たっている所です。次郎さんの事、捜査状況が気になっているんじゃないだろうか、てな訳で電話した次第」 「おっお、小生の言い回しが上手だね、でも情報、ありがとう」

「次郎節が気に入った、そんだけの事です、何か進展があつたら情報を、又入れます」

「ありがとう、そうしてくれると助かるし、手伝いが出来るでもないが身近で起こった事件だ、情報が入ると嬉しいよ」

「その時は電話すると言い、片岡警部補は電話を切ろうとした。次郎は、
「あいや待たれ」と言った。

「釧路で二つの大きな事件が起きた、率直に聞く、片岡さんはいかが想いますか」

「ウーム、次郎さんも気になっているんですか、管轄外とは言え心配だ。連続殺人事件にならなければいいんだが、今の所それ以上は」

「お忙しい所、余計な事を聞いてしまったようだ、御免なさい」

「次郎さん、わしも気になっている、捜査状況が入り次第連絡する」

「ありがとう、そうして下さい」と言い次郎は電話を切った。

「ほっほーこれが320 km、先程との相違が、車窓からの線路近くの木々や建物の流れで分かる。リクライニングし目を瞑る。1年振りでまりに会え

る、チームいつぶくのメンバーに会える、皆どんな顔して迎えてくれるだろうか、或いはあんた誰とでも、そんな想いでいる次郎は中々寝付かれないでいた。はやぶさ28号は定刻の17時04分に東京駅に着いた。中央線快速に乗り換え新宿駅に、京王線の快速でつつじヶ丘駅で降りた。スムーズに来たが、乗り換えや発車待ちで意外と時間をくった、バス発車迄10分待ち、駅舎を眺めたり辺りをうろついた。相変わらず物珍しいのだろう、小生を見る目が多い。

コーヒーショップは、いつぶくの入り口と厨房、それに一脚のテーブルを残して照明は消されている。そのテーブルで村上真姫（マキ）と寺島加奈（クロヒヨウ）に田川健次郎（ケン）は談笑している。

入り口扉が開いた。

「ブレンドで構わぬ、コーヒーをお頼み申しまする」

と髭もじやで袴姿が入って来た、次郎に空かさずマキが言う。

「もう閉店しておりますが」と言った。

厨房で洗い物をしていたまりが、ハタと手を止めマキに言う。

「マキちゃん構わないよ、一緒のテーブルに座て戴いて」

腑に落ちない顔をし、椅子を引きどうぞと。

「マキちゃんそのお方様の目をよく見て御覧なさい」

袴姿な男を怪訝そうな表情をし、隣の椅子に座った。クロヒヨウもケンも同様だ。次郎は、マキから正面になるように座りなおした、マキははてな顔から崩れかけ突如「ジロウ」と叫んだ。

クロヒヨウもケンも分からなかったか、ゴメンと言った表情を浮かべる、次

郎は立ち上り、

「むさ苦しい風体と、長い事留守にしてゴメン、失礼仕った」

と言った。

クシヤクヤな顔をし、マキも立ち上がる、両手拳で次郎の胸をトントンさせ、思いつきり抱き着いた。

まりが突如言った。

「終わったー」

と言い前掛けを外し、姐さ被りを取りタスキをとった。大皿にサンドイッチが大盛だ、

「次郎夕飯まだでしょ、食べて皆も一緒に食べようよ」

とテーブルにデーンと置いた。

「食べながら聞いて、先ずは私から話そうと椅子を引き寄せ、次郎の横に座った。

「次郎、どこに行こうが勝手だが、マキちゃんが可哀そうだったよ、失踪当時は毎日、その後一週間になったが、今でも一〇日に一度は、連絡あったと電話してきます。私は兎も角、偶にはマキちゃん連絡してあげたらどうだったの」

「相すまん事でした」

次郎は平あまり、マキはもう離さんとばかりに次郎の腕にしがみ付いた。淋しさ人一倍なマキちゃんに、次郎はどこかで一人生活を満喫しているよ、マキちゃんも楽しくやろうよ」

と言ってあげた。且て見た事がない半ば怒り気味な、まりのしゃべり方にサ

ンドイツちに伸ばす皆の手が止まった。

「次郎流に申せば、てな訳で次郎の通帳を引っ張り出し、あのミニをフルリメイクした、いくら掛かったかは通帳見ればわかります。後で説明するが、大柄なケンさんにも運転できるよう、運転席の座席を上下と前後に、大きくスライドするようにもした。それからサイドカーはクロヒョウさんが乗っています、私もパッセンジャーシートに乗せてもらいました。さすが運動神経抜群、ワイディングロードでは完璧な走りだった、これもいくら掛かったかは、通帳を見れば分かる。フルリメイク、ついでに私のハーレーの車検もしました」マキは要約落ち着いてきた、笑みが零れる。

「次郎いい、府中署のガキさんも高輪署の大さんと、あの名前が出てこないな、何と言ったけかな若い刑事さん、皆コーヒー飲みに来ては次郎さんどうしてる、連絡あったと聞いてきました。次郎、皆に連絡しといてね。まだあるけど今宵は以上です」

「あいや待たれ、これも次郎流だなど言い続きが、次郎が失踪前言っていた、寺島加奈さんと田川健二郎さん、二人は国王暗殺仲間ではない、無理やりさせられた。私はそんな事を思い出していた」

一審では実刑が課せられた。どこで聞いたかマキちゃんのお父さん、村上裕次郎さんの従兄弟さんが弁護士をなさっている、彼の紹介で敏腕弁護士、梶谷茂さんを紹介して下さった。ピース王国の大使館員だった、海老原幸子さんは今、本国勤務となっている。本国の外事課経由で本人に連絡を取った。寺島加奈さんと田川健二郎さんの二人は、拘置所生活をしいる又、二人は身内を拉致されたり唆されたりで、本心で殺害計画に加担した訳ではない、

先日も面会に行った時でも更生し切り、減刑に協力して頂きたいと伝えた」

次郎さんの奥様とあれば、何なりとと弾んだ声が返ってくる。

「次郎さんは何していますか日を持て余しているのでは」

「それが、一ヶ月になるかな失踪中、どこかで好きな事やっていると想う」

「心配しないの」

「したつてしょうがない、野鳥とでも遊んでいると想うよ」

「連絡があつたら言つといて、幸子にお世話になりっぱなしのまま、急に本国に来てしまった、有難うございました。そしてしーゆーあげいんと、

言つといてください。

で、「奥様私は何をすればいいのですか」

「今言つたように、寺島加奈と田川健二郎の二人は、一度は国王ご夫妻に銃を向けましたが本心ではない、このまま狭い部屋暮らしさせたんではと、元柔道の世界チャンピオンと、警視庁特捜隊の優秀隊員の二人です。国王様にも、減刑を求める書面をお願いしたい、宜しくお願いします」

「はい、分かりました早速、国王に伝えます」で電話は終えた。

翌日、ピース国王からのFAXが届いた。ウンザリア王女からもあつた。国王の方は現地語なので分からない、王女の方は日本語で書かれていた、A4紙に5枚でした。次郎さんの奥方様と、あの勇敢な武術家さんのお願いとあれば、惜しみなく記させて頂きました。で締めくくつてあつた。国王の方は大使館に持ち込んで翻訳してもらつた。驚くなかれ、駐日大使のラーソン大使が、出廷しても構わぬと申し出た、がここまでして下されば後は私達で頑張りますと言つた。タツカー国王さんと、ウンザリア王女さんの嘆願書と、

梶谷茂弁護士の話術で見事、執行猶予付きを勝ち取った。

保証人は双方谷端次郎と記する。次郎、クロヒヨウさんは以前からケーキ作りはプロ級、これを期に、今市のご両親は家と田畑を処分し、三鷹市新川に居を移す。クロヒヨウさんは親にも協力してもらい、小さいながらもアトレにケーキ屋、ジジババ店をオープンさせた。ケンさんは日頃次郎と交流がある警備会社へ、詳しくは個別に次郎に話してやって永く話してしまった」と言いうも再び話し始めた。

「この界限では、ここん所無かった様だったが、コンビニ強盗が立て続けて三軒、他に痴漢に不審者出沒、それに北海道の資産家のご子息が函館で射殺された。住まいは調布市若葉町、今はご婦人一人でお住まいになさっています、函館南署の要請で自宅は勿論、周辺を巡回警備しています。ここは以前と同じ、警察関係者さんが多い店故、今のいつぶくは昼、深大寺参拝客が僅かに利用している程度、陽が落ちるとお客様は皆無、それは次郎がいた頃と同じ。いつだったかなマトリの朝原敬一さんがいった。

「次郎さん入るかいと見えました、事情を説明するとまりさん、心配ではないのかい」

「一向にと答えた」

そんな事を言うまりさんを見て、安心したコーヒを頼むよと、雑談をしていると、

「今、困り事があつて弱っている所なんだ」

「私で良ければお聞きしますが」と言った。

「まあ奥さん、喋れば幾らか気が済むだろう、聞いて下さい」

「で、どんな事」

「ついこの間も大きな取引があると情報を得た。捜査陣を秘密裏に配備しその時を待った、が何も起こらず仕舞い、わしは間違いなく情報漏れだと確信した。次郎さんから連絡が入ったらその旨を話し、アドバイスをお願いしたいと仰っしやて下さい」

「それは大変な事です、次郎の奴いったい何処に行っちゃったんだろう、皆に迷惑や心配掛けおって、連絡が付いたらその事を伝えておきます」

「奥さん、有難うと言いコーヒーを飲み帰られました。でも次郎、何か事件でも持ち帰ったのでは、目がそう言っているみたい、昨日は女性から不安そうと言うか、怯えている様な声で、次郎さんいますかと電話があつた、現状を話した。そうしたら明後日会えると想います、その時と言い電話は切れな。又、今日の午前中、柳葉魚が届いた、送り人はルナとしか書いてなかった」

いつもは物静かなまりだが、この時とばかりに喋りまくった。そんなまりの話が終わると数秒、沈黙があり次郎が話し始めた。

「我が俣で、好き勝手な生活をして来た小生をお許し願います」

と言ひ、話し始めた。

「学生の頃の知り合いを通じて、雄阿寒岳の麓にある、別荘所有者を紹介された。別荘地の事、電気、上下水道完備ガスはプロパン。使用料は年十万、誰も分らん所で、自由奔放に生活してみよう、てな訳で所有者と手を打った」

「密かに衣類等々を送り出した。四月上旬空路釧路に入り、阿寒湖行路線

バスで阿寒湖畔に着く。そっから徒歩で、当分の食糧と撮影機材を背負い、別荘入りした。ポツンポツンと点在するような感じ、入り口で案内図を確認、目指す別荘は坂を上り詰めた一番上だ。歩を進めて行くと、二階建てのログハウスが見える。四月とは言え寒むー、だが辿り着く頃にはリックを背負った背に汗が、高橋康之さんが出迎えてくれた。

「ようこそ、遠い所をおいで下さいました。そこの縁台に荷物を置き休憩して下さい」と、高橋さんは言った。

「有難うございます、そうさせて頂きます」

と言うと、

「否、礼はいらない何故なら、たった今からこの主は谷端です。と高橋さんは笑った。では説明します、中に入りましょう」

入った先は二十畳程の、板張りの部屋になっている。中央に大型な薪ストーブが設置されている。高橋さんは内部の説明を始めた。

秋口から今頃までは炊きっぱなが常です、窓は全部二重になっています。ストーブの入り口から、入る程度の太い薪をくべておけば、火は朝までは持つ、又火力が強い故、真冬でも上着知らずです。キャスター付きの、椅子使用の、コの字型になった囲炉裏を指さした。この形だと座る人の人数は限られてしまう。何でそんな形にしたかと言うと冬場、薪ストーブを炊きます、人数に制限が出てしまいが皆に平均に、ストーブがあたる様になっている。ダイニングキッチンはガスと電氣が使えると言い奥へ、僅かに廊下があり、手前のドアを開けた。右側はウォッシュルームで正面は洗面所、廊下の端はシステムバスになっています。トイレと風呂は昨年リニューアルしました。

「だけど高橋さん、これだけ設備投資したんでは赤字ではと」

「そんなもん、どうだって良い、使う人が良かったー有難うございましたと言ってくれるのが、楽しみなんですと言い」

大笑いする。

「次郎、私もそんな所で住んでみたいなー」とマキが言い寄った。

二階は使うも使わんも谷端さん次第、が時折部屋の空気を入れ替えて下さい。

さあー納屋に行ってみようと、さっさと外に出て行き外部の説明。

シャッターを開け軽トラに乗った。これは薪運びに使ってたんだ、今も現役の四駆車は先月車検は取った。あれは小型ながらの雪かき車、まき割り機に草刈り機に、ユンボ等々みんな現役、燃料は自前だが全部使って構わんよ、あそこの材木は幕ストープ用だ。

ずーっと先の柵内ならば構わんよ、至れり尽くせりの高橋さんの説明は続く。裏手の沢からパイプで清水を、台所裏のタンクに導いてある、厳冬期は凍結に注意せねばならんが、台所と風呂場を含め屋内ならば使える。

ざっと説明したが質問はで、高橋さんはお茶を飲んだ。

「野鳥さんはどうですか」

と、小生は聞いた。

「おるぞ、ここかしこでわしには分らんがピーピーしちようる、阿寒湖では水鳥が、釣りはワカサギ釣りのメツカ、冬場は前面結氷するが穴釣りが出来る」

そんな次郎の話に、マキならずクロヒョウがケンジが体を乗り出し来た。

「次郎よかったね、喜び飛び回れる次郎の喜んだ顔が浮かんでくるよ」
とまりが次郎に言った。

クロヒヨウとケンジはその様子に要約、本来のまりさんに戻ったと顔を見
合わせ頷きあい、本来のアツアツ振りが見えたか、笑いを堪えるも親指
を立てグーサイン。

「サアー次郎、今度は柳葉魚を送って来たルナとか言う娘さんと、名乗らず
に電話を切った昨日の女性は誰なの、皆も心配してます誰なの」

次郎は座りなおして話し始める。

「ルナなる女性は、東京の大学生の四人組の一人、函館に向かうスーパー北
斗の16号内で、今ではレアと言うか、小生の出立が目についてしまった。

おじさん、否おにいちゃんと言わなきゃ怒らちゃうな、とリーダー格のルナ
が話しかけ来た。ルナ達は東京で大学に通う4人組で、北海道を旅行中です。
おにいちゃんのその恰好、レトロでかつこいい、一緒に写真撮らせてよ、皆
は席を立ち小生のシートに近づき寄って来た、小生は軽く承諾する。他の乗
客の目も何のその、今風な娘だな、個々に擦り寄りポーズを、とっかへひっ
かへ数カットづつ撮った。おにいちゃん、ありがとうと言い、つまみにどうぞ
とイカの丸焼きを置いて行った。スーパー北斗16号は函館駅に着いた、ホ
ームをカランコロンと歩いていたら、おにいちゃんの声」

先程の4人組だった。

「夕飯時だよねどこで食べるの、ねー教えてよと迫る。

「小生はヤリイカ処で、活づくり御膳を食する、そこで良かったらと」

「高そうだけどそこでいいやと」

その時の様子をジャスチャーを交え説明した。

「翌日、四人組は大沼公園方面へ出向いた、どこで見つけたか屋形テントで魚介類の販売店を見つける。おにいちちゃん、シシヤモ見つけたよ、本場ものの柳葉魚だよ食べる」

と電話してきた。

「おー頼む、明日には帰ると思う深大寺の方へ送くつといてくれ」

「あいきた」

とルナの声、それがその冷蔵庫に入っている柳葉魚で、次郎は小休止。

今度はマキが厨房に入りサイホンをいじりだした。

「っあ、マキちゃんごめんね、気が付かなかったお代わりお願い」

これはマキ流か、右手でガッテンし笑顔を作った。代わりコーヒーが揃うとまりが、次郎に向いて続きをと目で合図。

「昨日掛かって来た電話の女性、内容からして東京地検総務第一課の菊田理紗と、想う否相違ない。彼女は前の晩、小生等の隣でご主人と楽しく飲食しとったが、ご主人健斗さんのスマホが鳴った、何でも重要書類が手に入った、重要ゆえ、人目をはばかりたい、今すぐ青柳町の住吉漁港に来てほしい旨の電話だった。一人ぼっちになってしまった理紗さんに声を掛ける、こっちに來て皆で飲んで食べようよと、店の厚意もあるがとうとう閉店までいてしまった。翌日早朝、電話があつてからの事を皆に説明した。

射殺されたのは東都地検秘書課の菊田健斗さんで今、調布市仙川で警備巡回しているお宅のご本人、これからは奥様の理紗さんが、お一人で住まわれると聞いている、理紗とは函館で出会った理紗さんです。

誰しも浮かぬ顔だがやがて、マキが薄笑みを浮かべ、デカ長のお出ました、又聞き込みや捜査まがいな事が出来るぞ、と口の中でボソボソ。

「で、次郎はどうするつもり」とまりが言う。

「明日のお通夜と明後日の告別式に行つて来る」

「何はともあれ散髪だ、床場で何と言われるやも、そこで黒服用意して下さい」

マキが「幼稚園は冬休みだし自分も行く」

と言ったが、次郎が、

「遊びではない」と一喝す。

日付が変わりそうだとまりが言うと言は片付け始め、終わるとじゃーね、また明日と言ひ今宵は解散した。

次郎とまりは住居の二階に上がった、まりが言った。

「マキちゃんが明日行くか行かないか掛けようよ、私は来るに掛ける、次郎は来ないに掛けるでしょ」

「その賭けはやらない、俺の負けが分かっているから」

まりは大笑い。

翌朝、次郎はいつもながら早めの目覚めだ。朝トレに行く準備を始める、デジカメとコーヒーをザツクに詰めた、後は何かな忘れもんはないかな等々、コーヒーを飲みながら、ぽっけ弄ったりと出かけ前のひと時。さあー出陣だ、車庫に行つてみてアレレー、サイドカーとミニがない。そう言えば昨夜、まりが言っておったな、いくら掛かったかは通帳見れば分かると、そこでサイドカーはクロヒヨウが使い、ミニはマキが足代わりにしていると、車庫にはピツカ

ピカに磨き込まれリニユールしたまりのハーレーダビッドソンと埃だらけの小生の早馬だけだ。

僅かに立ち尽くしたが、ボロつきれで、よくも皆小生をコケにしたなとばかりに、力込めてポンポンと叩いた。やや油切れは感ずるが、意のまま走ってくれる。川沿いの遊歩道を川上に上った。端にはホトケノザ等雑草とは言え、可憐な花を付けている。一年前と同じ風景が続く、いつもの公園に着いた、一年前と変わりはない。スクワットや腹筋運動等を、無理せず休憩を含め小一時間、コーヒーを飲みながらラジオ体操を待った。公園では太極拳のグループもいる、個々に肢体を動かし運動する人も。イヤホンから第一体操が流れた、何故かここかしこに違和感が、それも年齢故の事かなと、川面に目を落とした。北へ帰る後れを取ったか、ヒドリガモさんが一羽、スイスイトと水草の間を行き来している。

いっぷく脇の階段を昇り、開き戸を開けただいまど中に入った。

「おかえり」とまりが言う。

「新聞は後にし朝食を先にして、納豆に焼きのり、生卵、シイタケと野菜と具沢山な味噌汁、ご飯は今準備します。日本を代表する朝飯です、どうぞ」

「いやー、答えられねえーなこの朝飯、堪らんぜごっさん」

と次郎は言う。

「ねー次郎、函館での射殺、釧路では小型漁船の爆発炎上、釧路空港駐車場の青酸カリによる自殺或いは他殺、どう想ってんの、又首突っ込むのと違う」

久々のまりとの朝飯、テレビもつけず黙々と食べている次郎の箸が、ハタ

と止まった。次郎は怪訝そうな顔をして言い出した。

「昨夜は、函館での射殺事件は言ったと思うのだが、釧路の小型漁船炎上と駐車場青酸カリ事件は言ったっけ」

と次郎はまりに向き直り説いた。

「次郎、今は警察手帳もない、一市民です、マキちゃん等を招き入れた危ない事はやめて下さい、仙川に住んでいる理紗さんがいささか気にはなるんですが」

数秒間が開いてまりが言った。

「とは言うものの、次郎は引きはしないと想う、釧路での二つの事件は共に繋がっている、それと函館射殺事件は二日で起こった。三つの事件は繋がっていると小生は確認した。そう寝言で言ってたよ」

次郎は、困惑気味な表情をまりに向けた。

「でも次郎、言い出したら総監でも引き下がらないんですよ、空いている時間帯にハーレーで走り回れば私は気が済みます。私はその件には関知しません、市民の安全と真実究明とあらば」

とまり。

「どう展開して行くか分らない、電話の内容からすると、お通夜で理紗さんに会い、相談事もあると想う、事はそれからだ」

まりは何げなく、食器を流しに集め洗い物を始めた。

8時半過ぎ、いっぶくの準備の入るとまりは和服に着替え、下に降りて行く、次郎も床場にはまだ時間がある、と言い少し遅れて下に降りた。

新聞を開いた、北海道の事件はもう載っていない、社会面、政治経済面へ

捲った時、聞きなれた重低音のエキゾースト音がし、裏の駐車場に止まった。クロヒョウ操るサイドカーだ、裏のドアから、

「おはよう御座います」

と発泡スチロールの箱を両手に提げ入って来る。

「あっ次郎さんおはよー、ケーキいっぱい持って来たよ食べて」

厨房からまりが、

「加奈ちゃんいつもありがとう、時間あるでしょ、コーヒー淹れるから次郎と一緒に飲んでって、積もる話もあるんでしよう」

「はい、頂きます」

提げて来た発泡スチロールの中から、ケーキを取り出しウインドケースの中へ、食欲をそそるよう丁寧に並べた。

そんな加奈ちゃんを不思議そうな目で見ていた次郎にまりは言った。「次郎、加奈ちゃんはね、賞味期限はたっぷりあるにも関わらず、閉店すると、その日のケーキは全部下げてしまう、それで、あっいけない次郎流になってしまったかな、そのケーキを無償でこうして持って来て下さる。いっぷくでは先着順にそのケーキを一つつつサービスしているの、今ではそのケーキを目当てに、コーヒーを飲み来るお客様もいます、十一時の開店前から表の長椅子で待っているお客様もいる程。次郎、加奈ちゃんに良くお礼言つといて」

「いやはや、クロヒョウ有難うございます」

その次郎の言葉を遮るかのようにクロヒョウは話し出した。

「礼を言うのは自分の方です、一審では実刑が言い渡されたが、まりさんの各方面へ働き掛けして下さり、二審では執行猶予付きが言い渡された。減刑

に携わって頂いたまりさんと、裁判当時の元デカ長、谷端次郎さんの名に感謝します、有難うございました」

で、クロヒヨウはコーヒーを飲み一息ついた。

「出所後、昔のケーキ作り仲間、新庄彩花さんにケーキ屋を始めるんだけど手伝ってと声を掛けた。加奈さんがケーキ屋始めんの、だったら是非とも一つ返事、二人其々流と言うか二人の違った好みのケーキを作りケース内を彩る。店番はジジババが中心だ自分達も臨機応変に絡まる、休みもそうだ、お陰で今でも日焼けに海外に行く事も出来ます、ジジババも全国区は吉祥寺で仕事が出来ると大喜び、長々と話してごめんなさい」

「そんなの構わん、ジジさんババサンともあれから2年以上は会っていないな、店に行ってみるよ、それと新庄綾香さんにもあってみたい、宜しく行つて下さい」

クロヒヨウは、一口二口、コーヒーを飲み乾すと控えめに話す。

「あのフルレストアされ黒さの艶は蘇り、走りは更に機敏さが増した、正に走る黒ヒヨウだ、BMWの走ろう会でも注目の的です。まりさんより永代使役されています、有難うございます」

次郎は腕組みをし、首を縦にウンウンと言った表情。加奈は立ち上がり帰り支度を始め、次郎に言い始める。

「次郎流の北海道楽しかったでしょう、次が有るかはですが、その折には自分にも声かけて、次郎は無言で首をコックリコックリする。

「北海道の事件、次郎流に真実究明を始めるんでしょ、自分にも手伝わせて」と言った。

まりは開店に向けて準備を始める。前掛けをし姐さ被りを、赤紐を口に銜えた、起用に右手を動かすし、タスキをしながら複雑な表情で笑みを作った。BMWの重低音が消えると次郎は床場に行って来るとまりに言った。

三鷹の行きつけの店へ、早馬の手綱をとった、普通の衣服を身に着けているが道行く人は皆振り向く、そんな事は我関知せず、直向きに走らせた。床場の開き戸を引いた、小生のボサボサ頭を見、怯んだ。

「お客様、どの様にカットすればいいでしょうか」

と躊躇気味、

「何も迷う事はない、バツサバツサと切り七三分けに出来る程度のスポーツ刈りに、お頼み申す」

そんなやり取りに奥からご主人が出て来る。

「何や次郎さんではござらんか、一年振りやな、まーよう伸ばしおって」

「山に籠って居った、散髪を仕損じた宜しくお願い致す」

ご主人はわしがやると言って、小生を理容椅子へ座られる。

「次郎さんいいか行くぜ」

と言いバツサバツサと始めた、髭も同様だ。

うつらうつらと船漕いでいたら、

「次郎さん終わっよ」

の声、鏡見たら別人の顔ようだ。

「ご主人、有難うございましたと店を出る」

いっぷくに戻るとまりの第一声、

「どちらさまだつてよ、それでやっぱしその刈り方にしたんだね、半世紀前の

カット」

と言いやがった。

「あつは、遅いけど今お昼作るから、どれでもいいからケーキを出して新聞でも見てて」

小生は言われるがまま。食事をしコーヒを飲み、寛いでいるとまりが言
い出す。

「黒衣装一式二階に釣るってあります、早いけど着替えしてたら」

その声を聞き、次郎は二階に上がって行った。ズボンを履きながら幾分や
せたかなとウエスト辺りを摩った、然程でもないやとポーンと叩く、香典袋
に谷端次郎と毛筆書きし、内ポケットに仕舞う。ルパン三世が喚いた、下に
いるまりからだ。

「お迎えの車が来ました、準備できたら降りて来て」

と小生、浮かぬ顔でいっぷくに降りた。

「マキちゃんが、ちゃんとお迎えに来てくれましたよ、今コーヒ淹れるから
ね」

マキは次郎を見て一瞬あつと、声を上げたマキはが、これならいいでしょ
うと、少し短めなスカートなれど黒で決めていた。

「むかーし流行っていたあのカット、止せばいいのにまた始めたの」

とまりが言う。

オッス、といつもの仕草をする次郎。そんな次郎にマキは落ち着いたか口
元に笑みが見られる。

「マキちゃん、昨夜はあれから二階に上がり次郎と賭けをした、来ては成ら

ぬ、遊びではないとこつぴどく叱られた。そんなマキちゃんは来る来ないどつちと、私は来るに掛けたの大当たり、マキちゃん良かったね、次郎をミニで運んでやって下さい」

「おおそうか、小生の負けだ」

と言いコーヒーを飲み乾す。

マキはお通夜に行くと言うのに、ルンルン気分になっていた。今では貴重品扱いか、珍しいマニュアル車、マキは巧みなハンドルをさばき、カチツカチツと決めるギアチェンジ、モスグリーン車は斎場に向け軽快に走る。

竹箒で、受付前の落ち葉を掃いていた五人の男女が、小生等を見つけた。待っていたかのように近寄って来る。

「谷端次郎さんですね」

と確認するように聞いて来た。

「はいそうです、でこっちは村上真姫です」と次郎は言う。

「はい、存じ上げています、いっぷくで時折お見かけします」

と湯岐尚子巡査が言う。

「容姿からは想像も出来ない、大の大人を一撃で倒してしまう柔術家さんで、次郎さんの良きパートナーと聞いています」

と言い、湯岐巡査は続けた。

「八丈島で、二人の大男をけり二発で吹っ飛ばした女性がいた、と聞いているがこちらにいる、村上真姫さんの事でしたか。私は調布署の生活安全課の岡山智義です、こちら様は元三鷹署の谷端警部。言っちゃなんだが次郎流捜査だった、上司の言う事は一切聞かず自分流に捜査する、甲斐あってか刑

事の中では早期解決に並ぶもの居ない、何時しか次郎さんを鬼のデカ長として名が広がった」

と皆の方を見、言いながら名刺を次郎とマキに渡す。

「私の右から巡査長の三浦浩二と先程の湯岐尚子、米田早苗巡査と続く、端は刑事組織犯罪対策課の山谷守巡査長です、今日明日と二日間、宜しく願います」

と丁重な紹介と挨拶されたので次郎は面食らった。週間平成の偽名紙を携帯番号を付け加えて其々に渡す。

「今では警察手帳もない、一市民です。何もないのでは、行った先々で人要学会い名刺も頂くと格好がつかない、ニュースを得た時にはいの一に提供する事を条件にディスクの許可を得、週間平成の名刺を作成。それ故余り畏まれると自分は困る、デカ長も困る次郎と気軽に呼んで下さい」

「でデカ長あいや次郎さん、今回、北海道での発砲事件、どの様にお考えになさって居るんですか、お考えをお聞きしたい」

「次郎と呼んで下さい、それと小生には敬語は必要ない、タメ口で構わん。

「仙川でお住いの北海道留萌市の資産家、飯島達郎の息子さんが射殺された。その奥方、理沙さんが仙川に一人住んでいる、函館南署の要請で日夜の警備、お疲れ様です。何かあれば連絡してくれる事になっている、が函館南署にお任せするしかない」

腹の中では首を突っ込むんだと、隣のマキが嘘つけとばかりな顔をしていた。

「で、自分等は如何したもんかな」

と次郎が言うと岡山警部補は、次郎さんは受付にでもご自由に、マキさんは湯岐巡査等と葬儀部、仲島チーフに聞いて手伝う振りし不審者に目を光らせて下さい。俺と三浦巡査長、山谷巡査長も葬儀部職員の顔をしてウロウロしている、どんな事でもいい、可笑しいなと想ったら直ぐ、電話しあう事以上、職務柄だろう、そう言って岡山警部補は指示を終える。

次郎とまりはいつもの様と言うか、そんなこんな会話しながらの朝食。ルパンが喚いた、函館南署の片岡警部補からだ。

朝のひと時だったかな御免、と言って警部はしゃべり始めた。

「鬼デカさん、否次郎さん今迄の捜査状況は話すから、アドバイスがあれば仰って下さい。射殺事件、警察と自衛隊を確認した所現在までに紛失はないと連絡があった、後は反社会組織だが搜索迄とはいかなかったが、ワルサーPPk所持は、今日現在確認とれていない、が引き続き搜索は続いている。住吉漁港での射殺、犯人は何所から来て何所へ消えたか、男か女か、捜査本部ではお手上げ状態、次郎さん、取敢えず報告しておくが何かあれば連絡して下さい」

「前にも言ったが小生には敬語は無しで、狩猟用とかクレー射撃で所持はあるとしても、拳銃は一般人が所持しているとは現在考えられない。反社会勢力の場合だが、組長さんか兄貴分が、手下にお前出てきたら家一軒持たせ幹部にしてやる、とか言われ出頭させる。その場合事件当日より三、四日から一週間だろう、出頭し来るかもしれない」

「わし等もその点を重要ししている、次郎さんが言ったように、前での三つは考えにくい、従って四つ目を、ワルサーP P kを中心に拳銃所持者をあたり、聞き込みをしている、又出頭者が出ないか両方で捜査している」

「ご苦労さんです、函館南署は総出で対処している模様が、見えるようだ」

「今こっちは昨日が通夜で今日は告別式です、小生もご両家のお誘い合って参列します、東京調布署員も五名参列する、葬儀社や参列者に交じり不審者に目を光らせる予定、昨夜の通夜は別にと行って何もなかったが告別式で進展があつた場合には、連絡入れます」

「次郎さんも、山籠もりから東京に帰つたは良いんだが、早々大変ですな――」

「これも宿命と想っている、所で片岡警部補、亡き菊田健斗さんの自宅は奥さんの理紗さんが一人で住んでいる。健斗さんの射殺が解明されない今、理沙さんにも危害があつてはならない、よつて昼夜を問わず警備している、そんな訳で、通夜と告別式署員が警備している」

「わし等は、健斗さんの銃殺の原因究明に、全力であたるのみです」

「それから警部補さん」

「次郎さん、なんででしょうか何なりと仰つて下さい」

「釧路の漁船爆発炎上、釧路空港駐車場の毒殺、二つの事件も気になるが、北海道留萌市の資産家は亡き、健斗さんの実家でもある、飯島達郎さんの周りでは、変わった事はなかったかな」

「こっちも留萌警察署、函館南署は昼夜を問わず邸宅から周辺にかけて警戒にあたっている、現在の所動きがないと聞く。あつ次郎さん、仲間から情

報があつたんだが、釧路の二件とも目撃者がおらん。

分かったのは小型漁船の爆発炎上と青酸カリ事件。この二つだか、漁船は水面上は皆無に等しい、浮いているのが不思議な程、持ち主特定は難しい。そして目撃者の証言から、岸壁に突っ込む前に蛇行を繰り返し、猛スピードで衝突したと言う。青酸カリの方は、身元を表すものは何もなかったが、空港内のレンタカー会社が申込書を確認した所、東京都小金井市居住の大里麻衣三十六歳主婦と記されていた。現在本人確認を取っており、二件とも自殺他殺両面から捜査しているとの事」

「ありがとう、何か分かったら連絡頼む」

了解と言って警部補は電話を切った。

「いよいよ、鬼デカさんのお出ましだね、無理せんといてね」

「ああいつだってマイペースや」

と言って次郎はお茶を飲んだ。新聞に目を通してしていると、まりがいつぶくの支度時間だから下に降りると言った。

「ワイシャツやスーツは、部屋に吊るしてあるから時間が来たら着替えてね」とまりは付け加えた。

少し早いがいっぶくに降り、コーヒーをまりに頼んだ。程無くしてマキもやって来た、裏手の駐車場に軽快な音と共にミニは止まった。ドアを開け「おっはよー」

と意気こんだ声がする。

「マキちゃん、コーヒー飲んで深呼吸しましょう」

と、まりが声を掛けた。

「はーい頂きます」

と言い、いっぷくに入って来た。

「爺っちゃんが、あのニジマスの燻製最高と言ってたよ、ワカサギの甘露煮もだって」

「そうか喜んでくれて嬉しいよ、と言っといてくれ」

「次郎が爺っちゃんに会った時にでも、言えばいいよ」

「そう言わずに言っというて」

「はい、分かりました」

「でも、マキさあー、礼服の着心地はどうだい、通常のマキバージョンより良いだろう」

「堅苦しくて敵わん、ミニから尻だし等々マキバージョンの方が楽や」

マキも、変わっておらんと次郎が言った。重低音を轟かせ表通りから裏の駐車場にサイドカーは入って来る、カナは何時もの様に大きな発泡スチロール箱を、店に持ち込んだ。

「カナちゃんありがとう、ショウケースに並べ終わったらコーヒー飲んでって、今淹れるからとまりが言う。」

「次郎、自分も葬儀行つて良いかしら、チームいっぷくのメンバーです。チームの為に何かしたい、何が起るとも限らん、葬儀社の手伝いをしながらでも、それと無く辺りを様子見でも」

「そうだ、カナにも来てもらったら、次郎と違った目があるかも知れんよ」

マキが言いきった。

「来ても構わんがケーキ屋・ジジババは如何する」

「彩花ちゃんが構わないよ、行ってらっしゃいと言ってくれた」

「あい分かった、サイドカーで来るかミニで一緒に行くかどっちにする」

「BMWで行きます」

「カナにはあの黒いサイドカーが合ってる、じゃー、向こうで会おう、着替えがあるが故、時間もかかるが慌てずにな」

「了解、深呼吸してからBMWに跨ります」

カナはコーヒーを飲み干し、軽快な重低音と共にいつぷくから消える。

斎場に次郎達は揃った、調布署員にクロヒヨウを紹介した。湯岐尚子と米田早苗の二人の婦警さんや、署員等はカナを紹介されビックリ顔、無理もない均整がとれ、あの細身の身体で、男性でも音を上げて仕舞う厳しい訓練を熟し見事、警視庁特殊隊員と成った。

そんな眼差しにカナは丁重に、

「寺島加奈です、宜しくお願いします」

と挨拶した。

そんな挨拶をされた生活安全課の岡山智義警部補は、慌てて言った。

「こちらこそ宜しくお願いします」

と言い、署員等を紹介す。葬儀社さんもクロヒヨウのお出ましにあれこれーと言った表情を浮かべている。

「寺島加奈です、お手伝いさせて頂きます何なりと仰って下さい」

東京みたか葬儀部、仲島チーフも戸惑い気味だ、告別式は始まった、お通夜と違って参列者は少ない、駐車場も半分程埋まる程度、黒い高級車が二台入って来た。一台目には村井瑠璃子秘書室長と小笠原忍秘書課係長が乗

っている、二台目に大谷浩二第一業務課課長と弁護士の畠田智樹乗って来た。受付で記帳し香典を出しお悔やみを言い斎場に入った。菊田理沙の同僚だろう五人程の二十代と思しき女性が、目を赤らめハンカチを手にしお焼香の順番を待っていた。岡山智義警部補と山谷守巡查長は今日も何もなく終わってくれとでも言っている様だ、斎場を忙しくろつくでもなく警備警戒している。マキもカナもそれと無く持ち場を熟していた。次郎は受付で参列者の対応におわれている。読経は終わった、斎場から理沙が出て来た。「親族の挨拶があってから、多摩斎場に行き茶毘に移します。休憩所を用意してあります、皆さんも一緒に行って下さい」と理沙が言う。

「調布署の方は、警備もあり多摩斎場に行くと言っていました、私達も一緒に緒させて下さい」

理沙は頷き斎場の中に、多摩斎場では親族だけで、お茶を飲みながら時間を待つだけだ。湯岐尚子巡查と米田早苗巡查に中の事は任せて、男警官と我々は休憩室で一息入れた。

「今日も東都地検からお偉方が来ました。記帳表を見ると弁護士の名もあった、課長や係長の個人的な弁護士なのか或いは、私には良く分らん」

と警部補は言う。

「小生も受付でそれに気づいた、若いし何者だろうか」

そんな人いたの、とマキが言う。徐にカナが口を開いた。

「秘書室長の村井瑠璃子、自分は何か引っ掛かりもんが」

「それって犯罪がらみの事か」

「そうじゃーなくも、はつきりした事が言え、あのなり振りが」

「カナもそう想ったか、昨夜、小生も分からん何かがあると」

マキがそれって何よって言った。

「自分には、何だかさっぱり分からなかった」

秘書室長と言えば、東都地検ではナンバー2と言つても、過言ではない。

多くの事柄は、ここを経由すると聞いている、女性で独身ながらもとんとん拍子で出世し、三十七を迎えた年に、室長に抜擢された。頭がきれる事は確かだ、電卓入らず、書類整理は他の類を呼ばず、速さは抜群、しかも適格、記憶も並大抵でないと聞く」

と警部がぽつりぽつりと話す。

「完璧な室長だな欠点はないのか」

「あるとすれば、完璧すぎて男性が寄ってこない、より付けないのでは」

またぽつりと警部。ところで警部と次郎は声を掛けた。

「今日のこれからの警備の予定は」

「菊田家は茶毘に移してから、初七日を執り行う。終了次第、仏さんを仙川の自宅に移動する、今日の任務はそこ迄で、夜勤勤務と交代する予定」

「小生等も、そこまで付き合うかな、菊田勝彦さんに初七日までいて下さい、理沙も言っているし他ならぬ次郎さんだ、お願いしますと言われてしまった」

「それが良い、次郎さんは函館からの付き合いだ、理沙さんも喜ぶと想うよ」

「そうすつか、じゃーマキもカナも付き合ってくれ」

二人はガッテンとばかりにVサインを出した。次郎は皆に悟られん様にガラケイをプッシュする。マキがどこに電話してんのと覗き込んだ、マキの知らない人だよ、電話は繋がった。

「三鷹署捜査一課の村上です」

と返ってきた。

「なーんだ父っ様じゃねーか」

皆は一課長に何の用事があるんだろうか、自然と次郎の方を見つめる。

「やー次郎さんお帰りなさい、燻製と甘露煮、美味かったよ道主も、酒にベリーグッドと言っていた」

「皆元気の様で何よりです。だけんどマキにやー、こっぴどく叱られました」

「あいつは次郎さんを、何様だと想ってんのか、鬼デカを捕まえて」

父っ様、みんな聞こえてると、電話口でマキが喚いた。

「何年たったって炊事洗濯まるつきしだめ、自分がみんなやっているじゃん、娘に頭が上がりんでよ」

「おいおいマキ、女だろうその言葉遣いは、次郎さんが用あって電話し来ている、続きがあるんだったら家に帰ってからやろう」

父っ様とマキのやり取りに、カナもみんなもあっけにとられている。次郎はマキを制してから、徐にしゃべり始めた。

「調べて頂きたい事があるんだ、無論所轄外の事、分かる範囲で構わん」

「どんな事でしょうか」

「釧路港での漁船爆発炎上も気になるが、今ん所は釧路空港の駐車場での青酸カリ死、レンタカー会社の証言で東京小金井市居住、主婦大里麻衣三

十六歳と判明、現在自殺他殺で捜査中と聞く、彼女の素行と言うかどんな女性なのか調べてほしい。それと東都地検の村井瑠璃子室長も同様に、他に地検職員と一緒に葬儀に来た、弁護士の畠田智樹、若いようだが彼の人物像、地検との関わりもお願いしたい」

「どれも所轄外ゆえの事、難しい面も多々だ、が、次郎さんの頼みとあらば調査に入ります、暫くの猶予を、だけど次郎さん、北海道漁船炎上、釧路空港駐車場の不審死いよいよ鬼デカ、出陣と言った所かな」

「うーん、現役を離れて大分経ち、衰えを感じると言った所だ、が函館で接し故、もう一人の次郎が騒ぎ始めたんさ、宜しくお願いします」

マキは次郎の携帯を取り、

「父っ様、しつかり調べよ」と言った。

菊田健斗は茶毘に移され、理沙さんに抱えられ出てくる。親族がその後に続き其々の車に乗った。初七日は仙川で執り行われる。中に入った湯岐尚子、米田早苗両巡査も、仲島チーフと進行係の大塚美和子さんと一緒に出て来た。

仙川の初七日会場の末席に、次郎達と巡査長の三浦浩二等、署員らが座った。菊田文雄さんと飯島達郎さんは、盛んにお酌に回って来る。署員等は職務中ですとお猪口に口を付ける程度で、マキとカナは今日は運転手、お清めですと、同じくお猪口に口を付けただけで済ませた。

「では料理に手を付けて下さい」

と理沙さんの進めで、二人は

「いったただきまーす」

と言い箸を取った。隣の次郎はお猪口に手出すではなからうか、気が気ではない様だ。岡山智義警部補の携帯が鳴った、ちよつと待てと言い警部はそのまま廊下に出る。

「警部補、たつ大変です、留守中の仙川の菊池宅に不審者が現れました。二人で警備巡回をしていたんです、喉が渴いたのと、ジュースでもと買いに出ました。飲み物が来る迄一休みと持ち場を離れたんです、十五分程休んでいました。その隙に邸内に入ったと想われるです、遠目に少し大きな目なバツクを持った男が門から出て行くのが見えました。電気かガスの検針だろうと想っていたんです、が気になり門を入り邸宅を外から見まわった。裏に回った、二人でトイレの前で想わずアツと声を発してしまった、ガラス窓が半円を描いて、綺麗にカットされ窓が開いていた」

話を聞いていた警部補は、手が震え形相が変わっていった。ばかもと怒鳴る声の中にも聞こえてくる、オクターブ上がった声が続く、やがて起こり疲れたか、携帯を切り中に入って来た。

「次郎さん困ったよ、部下の奴警備を怠った為、菊田さん宅に泥棒が入った模様、トイレのガラス窓から入ったようだ、詳細は行ってみないと分からない、柴崎隆係長に任せて私は菊田さん宅に向かう、もう直ぐ初七日も終わるだろう、次郎さん達は柴崎係長と一緒に、今まで通りそれと無く警備をお願いする」

「警部補、はっきり内容は分らんが、中にも電話の声が聞こえたよ、これ以上、部下を叱っちゃー遺憾よ、何時までもミスを引きずっては二人の為にもならん、会ったら二人を、労ってやって下さい、非番の時でもいっぷくに

コーヒー飲みに行こうと、誘ってやって下さい。まりもサービスすると想う警部補、分かったね」

その次郎の言葉を聞いて、警部補は挨拶そこそこに出て行った。理沙さんに紫崎隆係長からその旨が伝えられた、被害状況は帰ってからでなければ分かんが、理沙さんを始め両家では戸惑いを隠せない。

「次郎さん、一緒に自宅に来て下さい、心細いし不安です」

了解したと次郎は言った。

「予定もあろうと思いますが、ご両家お父さん、お母さんも一緒に、お願いします」

と、次郎は再び言った。

仙川の菊田邸では、大勢の警察官が其々の部署に着き捜査中、理沙等が着いたのは午後四時過ぎ、早々被害状況確認に着手、故健斗さんの部屋を重点に始められた。次郎も中に入るよう理沙に言われる、部屋はそんなに

荒らされてはいない、何を取られたか理沙にも良く分らない様だ。それでもディスクに置いてあった、ノートパソコンがないと係に言った。

「奥さん、ゆっくりでいいから、部屋の端から一つづつ確認して、行っして下さい」

と係警察官は言った。

「理沙ちゃん、お父さんもいるし深呼吸し落ちついて」

次郎の言葉に頷き深呼吸する。ディスクの椅子を引き座った、引き出しを見ていた理沙が言う。

「一番下に入っていたコンデジがない、充電器はあります、他にメモリーカ

ードが5、6枚あった様だがそれがみんなない、幾つあったかは不明だがUSBメモリーも有りません、電子辞書と電卓はそのままです」

理沙の言はそこで止まった。

「取敢えずディスク周りは以上でいいですか」

と係警察官、次は本棚に行きましよう、書籍類はきちんとしていて不規則に空いている様な所は無い。今度は壁に括り付けの棚に移った、ここはいっぱいに詰まっている事はなかったと言う。各段に隙間があったと言う、けど理沙は頻りと棚を見つめている、徐に言い出した。

「下の段の、書類を綴じてあったファイリングが何冊か無いようです、それと私達の写真持って行ってもと思います、アルバムが2冊ない」

「奥さんその写真どこに行った時のものですか」

と、係警察官は理沙に聞いた。

「健斗が東京見物しよう。どこか洒落た店で食事もしようと、その時のアルバムが2冊ありません」

リビング、ダイニングルーム等、一階を見て回ったがこれと言って取られたものはない様だ、二階は寝室や客間等四部屋あるが、ここも取られた物はない様だ。

「お巡りさん」

と理沙が声をかけた。

「神棚に置いてあった十万円は、そのままになっています。気がつかなかったのでしょうか」

「理沙さん、本件は金取りの犯行ではない、それと何時でも構わん、何か無

くなったものが気づいたら連絡して下さい」

と係警察官は言った。

「じゃー物取りなんですか」

「これから捜査会議を開く事になっている、詳細はそれ以降になる、待って下さい」

理沙は次郎を見頷く。午後九時過ぎ捜査陣営は、夜間警備員を残して菊田さん宅を後にした。

理沙は一人じゃー怖い泊ってって、と留萌市のご両親と弟の邦彦さんに言った。飯島達郎と奥様、邦彦さんは頷いた。次郎も立ち上がり小生等は帰るとうとうと立ち上がった。

「明日も来て」

と理沙が言った。

次郎の周りで、マキとカナがOKサイン。

翌日マキがカナを拾って、十時過ぎにいつぶくに来た。次郎はおはようさんとミニに乗り込んだ。昨日の今日だ、菊田邸の周りにはお巡りさんが多い、次郎に気づいたか敬礼するものが数人、ミニを所定の場所に誘導して貰い止めた。

「中で岡山警部がお待ちになっています」

と警察官が手招きする。既にリビングには理沙と菊田さん、飯島さん、調布署の刑事組織犯罪対策課の課長、太田和重さん、防犯課課長の岡山智義さん等が皆、各々に椅子に座っている。次郎達がおはようございますと言いいリビングルームに入った、三人掛けを空けてくれた。理沙のご両親が立ち上

がり連日、有難うございますと言った。

「小生等は余り、出すぎては遺憾と想いつつ今日も来ました」

「先程、警部補さん等にお聞き致しました、理沙はもとより私達には心強い
お方でございます、これからも宜しくお願いします」

菊田さん、飯島さんは言った。

「でこちらはと」

マキとカナを見た。

「失礼しました、まだ紹介しておらんかったな、右側が瀬戸内は村上水軍の
末裔で、お爺さんが水軍の技を引き継いだ北野流の首謀者、村上一太郎で
その孫で村上眞姫です、左は元警視庁特殊隊員の寺島加奈です。二人とも
武術の達人で通称マキにクロヒョウです」

二人は宜しくお願いしますとハモった。

「次郎さんも羨ましいよな、二人の美人で武術家秘書さんを、お連れしてい
るとは」

と飯島達郎さんが言うと、隣りで奥方が言った。

「お父さん私がいるのにと」

膝を小突いた。さて、にこやかな挨拶も終わった所で、昨日の事案経過を
お話しさせていただきます、と岡山警部が書類を持って立ち上がった。

「四月一日午後二時十五分。調布市仙川町の菊田邸で空き巣発生。本件第
一回捜査会議の内容を説明します、被疑者は門を入り横手に回り、トイレ
のガラス窓外側に、吸盤とガラスカッターを利用し、鍵部分を半円状にカッ
ト、手を入れ鍵を開けそこから侵入、室内物色に至る。盗難品は現在の所パ

ソコン、デジカメ、ファイリング等々で、皆様にお配りした書類に記してあります。犯人であります。侵入方法が前科者リストに載っている人物と類似している、空き巣専門の前科九犯、小泉昭一六十七歳であり群馬県生まれ、住所は杉並区松ノ木、今年一月二十三日に出所したとの事、現在身柄確保に全力を挙げている」

ここで警部はお茶を飲んで、市民安全課、紫崎隆係長に捕捉をお願いします。と、言い座った。柴崎係長は立ち上がり、一堂に挨拶をする。

「初めましてと言い、おはようございます太田和重です」

「本件は警部からも説明があったように、物取りのプロによる犯行とみている。ただ、現金には手を付けていない、小泉昭一の犯行とも思えないふし出て来ている、又組織犯罪犯の可能性も無視できない。その方面でも捜査を進めている、もっか組織犯を本庁に問い合わせ中です」

「次郎さん、ここまでで気づいた事は無いかな」

と警部は次郎に向き直った。マキとカナはさあー鬼デカのお出ましだとかりに身を乗り出した、次郎は二人をチラツと見、喋り始める。

「組犯対策課長さんもお出ましなさっている、小生も組織的犯罪がらみなのか引っ掛かり所がある、金品には目もくれず、盗難品にパソコン、デジカメ、ファイリングにアルバム等、空き巣には程遠い品々、普通空き巣は金品が目ではないのか、空き巣に必要なだから盗んだのに他ならないと思うのだが」

「小泉昭一に必要なのだらうかと、否こやつには必要ないと思う、狙うならば金品だ」

と警部補が言う。

小泉昭一では無いのだろうか、私も金品に手を付けていないのが気掛かりだ」

犯対策課長が今度は座ったまま言った。

僅か間が開いて次郎が口を開いた。

「理沙さん、アルバムにはどんな写真が貼ってあったか分かる」

「はい分かります、健斗が六本木に美味しいランチを食べさせてくれる店がある、次の休みにに行こうと言った。最初は桜田門辺りをぶらぶらし写真を撮ってくれた、こんなビルばつかな所で撮ったって味気ないよ、ましてや、仕事場のそばじゃーないの、あっちのお堀の方が良いよと言ったの、そうしたら、だからこそ撮るんだと言った。建物や通行人を入れて撮っていました」

と理沙は首を傾げている。

一同は不思議と想うより、理沙の次の言葉を待っている。

「そこから地下鉄に乗って六本木へ行きました。ネオンは点いていないが夕方振りの六本木、些か興奮気味でした、腕を組みブラブラしました。高飛び込み台のある一角で、はたと立ち止まった。今では低いと想われる六階建てのビルが隣接している、あたかもビルの窓から飛び込めるようだ。そこで健斗は写真を撮り始めました、ズームしたり忙しく撮っている、私にそこで立って写すからねとしばし、通行人に盗撮だと叱られる角度も多かった様だった。今想うに何故、そこで撮っていたかは定かではありません」

理沙は坦々とし喋った。ランチはどうなったんだ次郎が聞く。

「そこから青山通りを渡った所に、ステーキハウスがありました、そこでステーキを食べました。店内は明るからず暗からずの照明、昼時だ、入り口脇の

椅子で順番待ちしている。健斗が予約してあったので入り口で名を伝えたと菊田様、こちらへと案内嬢が歩を進める、中央に大きな円形テーブルがあり、私達はその周りの二座に案内された。

内側でシェフが数人、鉄板で焼くようになっていた。シェフが焼き加減はと言う、お任せしますと言うとやおら、レードを鉄板に、ジャーと解ける音が、頃合いを見、ニンニクを二かけら中華包丁で潰し脇に置く、分厚い手のひら大の牛肉を鉄板に載せた。シェフはこまめに返したり、コシヨウ等調味料を牛肉と接しさせていた。焼酎が良いと健斗が言うが、取敢えずこの場はワインでと私は言いました」

マキが更に身を乗り出し聞き入っている。

「美味しかった事でしよう、健斗さんが六本木で撮った写真の中に犯人側には善らぬものが写っていたんだろう」

「もし、善からぬものが写っていたとしても目下の所、私には何だか分からない」

「次郎さん、お考え有難うございます、捜査会議で話してみます、今日はここで我々は引き揚げます、奥さんも他に何かお気づきがあったら、いつでもご連絡して下さい」

そう言って警部等は菊田邸を後にした。菊田さんご夫妻と飯島さんご夫妻、弟邦彦さん、それに小生達三人の八人となった。空き巣は解決せんかったが一段落し、皆落ち着いたのか、飯島さんが赤銅色の顔を綻ばせ、伏し目がちにクロヒヨウに言った。

「女性にこんな事を聞くのは遺憾と想います」

次郎達も、皆も次に出てくる言葉は何なのか、自然と飯島さんに視線が集まった。

「わしは、顔の色他に類はないと想っていたが、カナさんは色黒とお見受けします、わしは負けました、それは何故とー」

と末尾が濁った。奥さんがばっか、そんな事聞くもんじゃーないと、怒り飯島さんの脇腹を小突いていた。カナも女性陣もあれつとした表情だ。

「クロヒヨウ、自分で説明しろ」

と次郎が合いの手を入れる。

「はい、説明します」

と飯島さんに向いて言い始める。

「学生の頃、水泳部に入っていました、暇を見つけては海にも行っていました。夏は裏表見分けがつかない程真っ黒け、特捜隊に入ると、夏場の休日は勿論海、冬場はトンボ返りで南国の海に行き日焼けを楽しんでいた。暗い過去はありましたが、今は両親と共にケーキ屋を始めました。海は今でも年を通して月三、四回は行っています、何時しか黒色が抜けなくなっちゃいました」

と恥じらいと共にカナはぺコリと頭を下げた。

「冬場に南の海に行くにしても、日にちは如何にしている、ケーキ屋さんをやっているのでは暇がないのでは」

「店番は親がやっています。朝からケーキ作りし、出来次第店に運び陳列して終わり、用がない時はそのままジジババと一緒に店番しています。それと友達が手伝ってくれているので、以外と時間の余裕はあります」

飯島さんは、カナの説明が終わると意外な事を言い始める。

「カナさんとやら、隣りのウーン何と言ったつけかな、あっいけないマキちゃんだ、どうだね一緒に留萌市に来んかへ、漁船にも乗せるし取立ての魚介類を鰯腹食べれるよ」

又もや奥さんが、飯島さんの脇腹を突つつき言い出した。

「お父さんいい加減になさい、健斗さんのお葬式も終わったばかりなのに、綺麗な人を見るとすぐそれだ」

今度は菊田洋子さんが言い出した。

「奥さん、良いじゃー無いですか、理沙にも笑みが見られる様になりました。うちのなんか、農協の若い女性を見かけると、すっすつと寄り添いダベリングも暫しです。で、次郎さんお昼になります、何所かご存じの所はありませんでしょうか」

次郎はたじろんだが、マキ、三進に電話を入れろと言う。マキはおいきたと返事しプッシュし始めた。

「北海道の漁師さんが行く、へタな物は出せんぞ」

と、マキは言った。

皆、暖簾をくぐった、らっしやいと若女将の声、奥の大部屋に通された、皆が座った所で理沙が言い出す。

「今の所は警備されているとは言え怖い、空き巣は命までは取らないが、早く引っ越したい、食事が終わったら一緒に不動産屋に行って下さい、親もいますが、地元の人が行って下されば心強い」

私達からもお願いします、と菊田さん飯島さん。

「分かりました、ご一緒させて頂きます」

と次郎。

「お待ちー」

と大将自ら、数々の皿物を運んで来た、後ほど飲み物の注文に参ります。

飯島さんが奥様の顔を見ながら言う。

「わしゃー、熱爛、菊田さんは次郎さんは」

と言った。

「少しお付き合いさせて頂きます」

と菊田さん。

「まだこれから大事な仕事があります、運転も」

と次郎達はソフトドリンクを頼んだ、アルコールは菊田さん飯島さんに任せて食べるに専念する。二人とも強い、奥方達がもう、いい加減にしなさいと言った。それが聞こえたか大将、若女将らでうな重が運ばれて来た。「お、お、ウナギ」

とご両家は其々に言う。

「ここの店はウナギ屋です」

マキが言った。

食後、理沙は家の鍵を飯島浩子さんに渡した。

「次郎さん達と私は、これから不動産屋に行くから先に帰ってて」

理沙の言葉に、菊田さん飯島さんは頷いた。

理沙の言う不動産屋は、仙川商店街の中ほどにあった。

「こんにちは」

と押戸を開け理沙が入った。我々も続く、店長の益戸剛さんは次郎を見つめるなり言った。

「次郎さんではないか、こんにちわ」

次郎はあれつとした表情で、店長に向き治った。

「周旋屋をやっていると、聞いていたがここの店でしたか」

「はい、飲み屋では詳しい事は言っていなかった、当店はチェーン店でこの店長になって早五年です」

「そうだなー、飲んでいる時は互い仕事の事は話さなかったよな」

と次郎は言う。

「でも次郎さん時たま、女性を連れて飲んでいたよ、今日は三人も連れて、昼酎だったんですか」

「おいおい、いくら焼酎好きだからと言って昼だから昼酎はないだろう、今日は取引に来たんだ」

「えっ、そういますと」

「こちらのお嬢さんをお忘れしたんじゃー」

益戸店長は一瞬目が固まった。

「いやー、申し訳ございません菊田様であられまする、申し訳ございませんでした」

「益戸店長、今迄の事は聞いている、だけんど我々にも、マンションを見せ頂きませんか」

「はい、すぐ参りましょう、歩ってもすぐの所ですが車を用意します。店頭で待っていて下さい」

程無くして、横に店名が大きく記されているセダンが来た。一通だの右折禁止があるので、ぐるっと遠回りし、マンションの駐車場に止まった。益戸店長は大きく両開きするガラス後脇のボックスを開け、数字キーを五回押し中に入った、

「ここがエントランスホールです。右奥にエレベーターが三基あります、では五階に行

きましょう。降りた所で右に行きましょう五二五号室です」

益戸店長は鍵を開け室内に入った。2LDKながら広々とした。間取りに次郎は言った。

「こりゃー良いなー」

とべた褒め、マキもカナも良いなーを連発。益戸店長は手もみしながら

「築10年経っておりますが、当物件は、お一人様とか新婚様向けに人気があります。事実、菊田様がご来店された後で、お二人様が見に来ております」

マキはうーむ、そうかいと言い理沙に聞いた。

「どうですか、気に入った」

「6階が高くて良いんだけど空き物件はない、よって5階のこの部屋が気に入った。マキさんカナさん次郎さん、どう」

「不具合が無ければいいと思うよ、店長その辺はどうなっている」

「ウォークインクローゼットの扉が、ぎこちないので修理します、他にシステムバス、エアコン、システムキッチン、ウオッシュレットも点検整備します。不具合とみられるものは修理いたします、カーテンは菊田さんで付けて頂い

ても構いませんが、寸法測定やらで日にちも掛かってしまいます、宜しかったら当店専属の業者が居りますので、ご利用戴いても構いません」

次郎達も一通り見まわした、

「理沙、どうだね小生はここで決めて良いと思う」

「はい、そうします」

と理沙は言った。

店に戻った、理沙は契約書に記入し判を押した。

「即、入居したい」

と理沙は言う。

「大掃除もありますし3日はお待ち下さい。これはカーテンのサンプルです、リビングと寝室の2カ所必要です、レースとの二重になります。注文日の翌日上がりです」

普通、1週間は掛るのではと理沙が言った。

「何分にも次郎さんです、即作業いたします」

と益戸店長。次郎の名が広く知れ渡っているんだと理沙は悟った。で、益戸店長は次郎を始め皆の顔を見ながら控えめに言う。

「お支払いは」

と言った。

「あつ、ごめんなさい今、お支払いします」

と理沙が言い小切手帳を出した。

「で、いか程」と益戸店長の顔を見た。

店長は一瞬たじろんだが、

「前回申し上げた通りでお願いします、次郎さんの顔を立てる意味で消費税込みでいかがでしょうか」

次郎も理沙もあれつとした表情、すぐさま有難うございます。理沙は父親の小切手帳に金額を綺麗に漢字で記入する。従業員がコーヒーを淹れてくれた、益戸店長は取引は無事に終わりましたと言い、次郎達と雑談を始めた。

菊田宅に戻った次郎達は、両家の方々に歓待される。皆さん、ありがとうございますと其々に口した。

「富士山も見え部屋も広々、中々どうして良い部屋ですね」

「今引越し業者に連絡を取りました、明後日決まりました」

菊田さんが言う。

「後二晩、辛抱すれば引越しは出来るこれで一安心です」

徐に次郎が言い出した。

「荷物を整理する時、東都地検と想われる品々があったら別に纏めておいて下さい。又それらは今後必要ないと想える物であれば、小生に預けて下さい」

理沙は、何だろうとした顔して次郎に尋ねた。

「確かとは言えんが、昨日の空き巣と健斗さんの射殺事件、それは繋がっている様に想える、殆ど持っていかれたと想うのだが、あったらお願いします」

「早々に真相が分かれば良いんだが」

と菊田陽子さんが言う。

「函館南署も、調布警察もフル動員掛け、真相究明に努めている。今は警察署員にお任せするしかない」

皆は頷いた。次郎さん分かりましたと理沙が、揃い次第連絡します。と言
い、早速引っ越し荷物の整理を始めた。両親に手伝ってと言いい次郎達にお
茶のお代わりを出した。

いっぷくに戻った。

「次郎さんお帰りなさい」

とオクターブ上がった声で迎えてくれた。

ノリだ、只今と声しハグする。

「何所に行ってたかはさっきまりさんに聞いた、それで日々、どんな暮らして
いたか徐々に話して、自分は興味あるよん」

「相分かった、小鳥の声で目が覚め、炊事洗濯が終わると筋トレ等々体操、
野鳥撮影に薪割りに草刈り、気が向けば釣り、簡単に言えばそんなとこ詳し
く聞きたければ時間を取ってゆっくり説明するよ」

ふーんと言った表情で、ノリはコーヒーを飲んだ。

「そう言えば今日は、ノリの演奏会の日なんだな、そんで新曲は用意出来て
んのかえ」

そんな次郎の問いにノリが話し始めた時、ルパンが喚いた。函館南署の片
岡警部補からだ、次郎ですとガラケイにしゃべった。

「次郎さん、元気しとるかい、一年もほったらかしにして奥方にお叱りを被
ったのではないかい」

「ご想像にお任せします、で、今日は何様で」

「おっ、いけないそうだった、銃殺事件はお手上げ状態だ。住吉漁港へマル
ヒは、どうやって行きどうやって帰ったかと、皆目見当がつかんのよ、捜査

本部では自殺説が浮上している。だがその場合拳銃の入手経路はいかに、自殺した後拳銃はどうなったのか、自分で発射してから海に投げ込む力などあったのだろうか。近々捜査員が理沙さんから事情聴取に伺うと聞いている」

「その時は小生も同席できるように話しといて下さい」

次郎は言った。

「分かった、伺う前に次郎さんに連絡致す」

警部補の張り切った声が返って来た。

「反社会勢力の方もカナぶりや、彼等だとすると出頭者が出て来ても良い時期なんだが、逆に彼等に捜査員が馬鹿にされる始末。留萌市の資産家を狙った犯行と想われたが、其方も進展なし、警備体制を緩めるか検討する向きもある、が飯島さんご夫妻が戻るまでは現行状況で行く、戻った時に検討しよう」と留萌警察は言っている。どうだい次郎さん、何か閃かんかい」

「こっちでは健斗さんのお住まいが葬儀中に空き巣にやられた、手口から常習者が浮かび上がった。だけど警部補、可笑しいんだよ一切金品は手つかずなんだ」

「普通は空き巣なら金目目的なんだいな」

「警部補もそう思うよな、今回は違うんだよ」

「で、何を盗んだんだ」

警部の疑い気味な声が返って来る。

「P Cとかカメラにコンパクトディスク、U S Bディスクにアルバム、ファイリングが十数冊等々なんだ、警部補いかに想う」

「金品以外の何かが目的であつたようですね、それらは健斗さんの仕事上の物なのか」

「アルバムは兎も角、後は健斗さんの使用物の様です、小生想うに、仕事絡みな空き巣と想われる」

と、次郎が言うとすぐさま警部補が言い出した。

「ジャー何か、東都地検でも絡んでいると言うのか」

「空き巣が確保出来れば、詳細が分かると想うのだが、今の所、何分にも確かな事は言えない」

警部補は了解と言い、お茶を飲み一息ついてから話し始めた。

「釧路の件だが、漁船の持ち主が判明した、八戸漁港の第二山葉丸、所有者は土田太郎です」

「八戸漁港の漁船が何故に釧路港に来ていたの」

かと次郎は尋ねた。

「他港に入るのは珍しい事ではない、ただ、炎上してしまった事はただ事ではない、釧路警察、釧路消防署によると岸壁に激突した際、燃料に引火し爆発炎上と聞く、辛うじて浮いている船内から、焼き爛れ半ば白骨した遺体が見つかった。所有者の土田太郎ではないかと確認を急いでいる。

釧路空港駐車場の方は、自殺ではないかと釧路警察捜査本部では言っている。マルヒらしき人物の目撃情報は無し、車の駐車位置が防犯カメラの死角になっていて誰がいたか、誰が乗降したかは定かではないが、捜査本部では自殺と断定した。がこっちは捜査員が東京に出向き家族から事情を聴くと言っている。どうだい次郎さんこっちも閃いた事は無いかい」

「漁船の方は捜査員は出さないのか」

「今週中に出向くと言っていた、こっちは乗船者は一人だけと判断している、だが、何の為に釧路漁港にいたのか、八戸へ行つて聞く予定になっている」

「情報が入ったら小生にも聞かせて下さい」

「お安い御用だが、親族は母親がいるだけ、親子二人暮らしだそうです。」

母親が細々と、干物を売っているそうで専ら息子、太郎のマグロ釣りに掛けていると聞く、まーそんなところだ新情報が入ったら又電話します」

傍らでマキとカナが、耳をダンボにして聞いていた。ノリも入り四人でコーヒ―を嗜み始めマキが口を開いた。

「次郎、北海道へ行くの、行く時は自分達も連れってって、いつ行くの」

「まだ分からん、そんな時は皆にも声かけるから」

行く行くと三人はハモった。

「皆に危険な事させてはいけません」

とまりが厨房で言った。

「まりさん、自分達だって大人です、危険な事は分け前ています。危ない事を望んではいません、ご心配なく」

次郎はマキの奴と腹の中で言い小笑いした。ノリのショウタイム迄後十分だ、ノリは曲のチョイスと音響機器の調整に入った。

「次郎さん、帰ったんだって」

と稲垣巡査長が弾んだ声と共に、ドアを押し開け入って来た。

「北海道の籠城生活はおいおいにして、何か事件を持って帰った来たのと違う」と次郎の前に座った。

「ガキさんいきなり何を言んうだ。小生は、その為に帰って来たんじゃー無いよ」

「次郎さんの行く先々に、事件絡みに遭遇すると専ら噂がたっています」

「小生、事件も無く、好き勝手に旅するのが好きなんだ、今回は自然と相対し自由勝手に生活してきました。事件とは程遠いものでした」

「で、拙者に何か事件のお土産を」

「あーガキさんに会っちゃー敵わんよ、帰路函館の食事処で、隣り合ったご夫婦とご一緒させて頂いた、そのご主人が射殺されてしまった。他国では女一人寂しく不安です、そんなこんなで捜査本部に同行したり、遺体の搬送手配と動き回った」

そんな事もあったと次郎は言う。

「次郎さん、言葉を返すようだが、それだけで終わったんじゃー無いよな、まりさんや皆が笑えを堪えている、もっと真面目に話してくれ」

次郎は帰ってから今日までをガキさんに話した。

「拙者に出来る事はありませんか」

「あれば直ぐお願いする、今ん所これと言って無いな、コーヒー飲みながらノリの歌を聞いてやって下さい」

と次郎はマキ達にお願いと言ってトイレに立った。

背を丸めてガードマンの田川健次郎が入って来た、警備が長引いちやつて、ゴメンゴメンと言いながらマキ達の隣に座った。その声が聞こえたかノリのワンマンショウは始まった。のりのいい乃木坂46の歌だ、3曲披露する。

「歌い継がれてきました昭和の名曲の数々をお送りいたしましょう、只今準

備いたします」

と言って裏手へ消えた。

スクリーンには有楽町から銀座方面を映し出された。

「ノリも当時のファッションだろう、膝下10cm位迄の裾が広がった、真っ赤なギャザースカートに、男物のシャツだろう、白の下地に薄いピンクの格子柄シャツ、無造作に腕捲りしている。曲に合わせてくるっと回るとスカートがパツと広がった。

リタイア組と思いき5人組からやんやの喝采を浴びる。真っ赤な太陽やら往年のヒット曲が続く、曲が終わりマイクを持ち中央へ、ノリが語り掛ける様に言い始めた。

「今宵もラストステージになってしまいました」と言い、

これもノリの設定だろうしゃべり終わらぬ内にイントロが流れ始める。

ドドンパだ、東京ドドンパ娘をワンコーラス終わると曲が徐々に変わって来た。ジルバ調で、好きになった人のイントロが流れる、ノリは曲に合わせてソロダンス、先程の五人組の所にステップしながら近づき、手を差しのべた。いかにも刑事らしいお方が立ち上がり、ノリの手を握った。やんやの喝采を浴びる、ノリは広がった所へエスコート、二人でジルバが始まった。ノリはステップしつつかくく回る、時にはお方様の胸元に、ここかしこで騒めきと共に拍手が起こる。ジルバは完璧にノリがリードしていた、忙しく動き回るダンスナンバーだ。お方様の額に汗が滲む。ツーコーラス分踊った所で、お方様を曲に合わステップしながら、席に落ち着かせて拍手を浴びた。ノリは右に左に歩を進め歌う、最後は腕を振り頭上に揚げ今宵は幕ですと告げる。

その歌姿に本家都はるみも負けそう、三十分のワンマンショーは終わった。いっぷくのお客さんは出来たもの、好きになった人が終わると皆出口へ、ノリは皆に有難うございました、又来週とハイタッチす。